

インゲンマメ (露地抑制栽培)

種まきは8月中旬以降

満留 克俊

インゲンマメの原産地は中央アメリカから南アメリカで、日本へは江戸時代初期の1654年に、中国からの帰化僧、隠元禅師が伝えたと言われています。漢字では「隠元豆」と書き、和名の由来になっています。

日本では煮豆や甘納豆などに利用される成熟種子栽培と、ごまあえや天ぷらなどに利用される若莢(わかさや)栽培が行われています。鹿児島は全国有数の若莢栽培の産地で、温暖な気候を利用し秋から春にかけての生産が盛んです。

インゲンマメは栄養バランスに優れ、タンパク質、糖質、食物繊維、ビタミンB1、B2、カリウムなどが豊富な緑黄色野菜です。

今回は露地で比較的栽培が容易な若莢の10~11月どり作型を紹介します。

品種は草丈が2mを超える「つる性種」と草丈の低い「わい性種」に分けられますが、台風の影響を受けやすいこの作型ではわい性種が栽培しやすいです。

発芽適温は20~25度、生育適温は15~25度で、30度以上では莢の着きが不良になります。そのため、種まきは開花の時期が10月以降になる8月中旬以降が適します。

本ばは日当たり、水はけのよい場を選び、1平方m当たり苦土石灰100g、堆肥2kg、化学肥料100g(チッ素、リン酸、カリ成分各15%の場合)を目安として施します。うね幅は80~90cm、株間は30cm、一条植えとします。うね立て後、乾燥防止と雑草対策のためマルチで被覆します。この時期は気温が高いため、地温が上がりすぎないように白黒マルチを白面(はくめん)が表になるように被覆します。

種まきは育苗もできますが、じかまきが一般的です。1カ所に1.5cm程度の深さになるように2粒まいた後、覆土し軽く鎮圧します。その際、土が乾燥しすぎたり、水分が多すぎたりすると発芽不良になりやすいため、適度な水分状態で種まきするように注意しましょう。発芽後は1本に間引きします。

その後、倒伏防止のために高さ50cm程度で1.5mおきに支柱を立て、生育に応じて横ひもを張り、茎葉を挟み込むように誘引します。は種後50日程度、開花後15日程度で収穫できます。莢のとり遅れは品質が低下するだけでなく、樹勢が弱りやすくなるため、莢の長さが12~14cm程度で収穫しましょう。

(鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室主任研究員)

